

【原 著】

大学生におけるインターネット使用態度, インターネット
依存傾向とインターネット使用開始時の使用状況との関連

三宅 幹子

Relationship between Attitude towards Internet Use, Tendency of Internet Addiction
and Internet Usage at the Time of First Use in University Students

MIYAKE Motoko

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

大学生におけるインターネット使用態度, インターネット 依存傾向とインターネット使用開始時の使用状況との関連

三宅 幹子※1

大学生を対象として, インターネット使用態度, インターネット依存傾向と, インターネット使用開始時の使用状況との関連について, 質問紙調査を用いて検討した。調査に参加した大学生95名のうち, インターネットの使用開始が小学5, 6年生から中学3年生までの間であった60名を対象に分析を行った。分析の結果, 主として以下のことが明らかとなった。使用開始時の使用実態が望ましいものであるほど大学生時点でも安全な使用ができている傾向があり, また, 使用開始時の使用実態が望ましくかつ自律的に管理できているほど大学生時点においてインターネット依存に陥るリスクは低い可能性が示唆された。これらのことから, 子どものインターネット使用をめぐる問題に関して, 使用実態の望ましさだけでなく, 自律的か他律的かという観点からも使用状況を捉えることの重要性が示唆された。

キーワード: 情報モラル教育, インターネット使用態度, インターネット依存, 自律的使用

※1 岡山大学大学院教育学研究科

I 問題と目的

スマートフォンやゲーム機器等, 子どもがインターネット環境を手にする時期は年々低年齢化する傾向にあり(例えば内閣府, 2020), ネット依存, ネットいじめ, 睡眠不足や生活習慣の乱れ等, 子どものインターネット使用をめぐる様々な問題が指摘されてきた。こうしたインターネットに関わる子どもの問題への関心は世界的に高まっており(Campbell & Bauman, 2018), 諸外国との比較では, 日本の子どものインターネットを巡る課題の状況は悪いとはいえないものの(Strohmeier, Aoyama, Grading, & Toda, 2012)決して楽観視することはできない。

学校現場ではこうした問題に対処するため, 情報モラル教育が推進されてきたが, その内容は, インターネット使用の問題点や危険を啓発しトラブルを予防したり, ルール等を設け使用を制限したりする方向で行われることが多い(酒井・塩田, 2018)。しかし, こうした大人主導の他律的な対策は, 子ども側のインターネットの使用実態が非常に速いスピードで刻々と変化し続け大人からは把握しづらいため, 問題状況に対して常に後追いとならざるを得ない。その意味で, 大人主導の規制・介入だけでは解決しえない領域であるといえる。

また一方で、インターネットは現代を生きる私達には最早必須のツールであり、Society5.0の到来に向け、子どもの情報リテラシーの育成やインターネット活用について考えるとき、「危険から子どもを守る」という予防的観点のみならず「より良く使いこなすための自己指導力を育てる」という開発的な観点を欠くことはできない。with コロナ時代においてオンライン活用の重要性がさらに高まっている現状を顧みてもこのことは喫緊の課題といえよう。

この点に関して酒井・塩田（2018）は、現在の教育現場において、子どものインターネット使用に関する指導は、リスク回避や情報モラルの観点から規制することを中心に論じられることが多く、子どもの中に自律的な使用態度を育てるという観点から取り上げられる事は未だ少ないことを指摘した。そして、その観点の有用性について中学生を対象とした質問紙調査により検討した。その結果、ネット依存を改善するために「自律的利用意識」「利用実態の把握」が有効である可能性を報告している。

また、子どものインターネット使用をめぐる問題のうち、対人関係やコミュニケーション能力が絡む問題の背景には、対人関係形成能力や社会的スキル等の未発達や課題がある事が指摘されていることから（例えば、西野・原田・若本，2018），子どものインターネット問題への対応を考える際の姿勢として、発達を促進する開発的なスタンスで取り組む重要性が指摘できる。

先に述べたように、子どものインターネット使用に関する指導は、リスク回避や情報モラルの観点から論じられることが多く、子どもの中に自律的な使用態度を育てるという観点は未だ少ない（酒井・塩田，2018）。そこで本研究では、子どもの自律的なインターネット使用態度を育てることの有効性に関する基礎データを収集するため、大学生を対象として、インターネット使用開始時点での使用状況、親や家族による指導や介入の状況と、大学生である現在の使用態度、インターネット依存傾向との関連について検討することとした。

II 方法

1 調査参加者

総合大学の教育学部に在籍する学生95名（男性34名，女性60名，不明1名）が調査に参加した。調査参加者のほとんどは中学校教諭免許状取得が卒業要件となる課程の在籍者であった。

2 質問紙の構成

調査に使用した質問紙は、（1）インターネットの使用歴・使用状況、（2）現在のインターネット使用態度、（3）インターネット依存傾向の3つの部分から構成されていた。

（1）インターネットの使用歴・使用状況

インターネットの使用歴・使用状況として、小学校入学前～現在（大学）までの期間について、①使用歴、②通信量・時間のコントロール状況、および危

危険・トラブル回避に関するリスク状況、③②の管理における自律・他律の程度を尋ねた。

具体的には、「①使用歴」については、「小学校入学前」から現在に至るまでの時期について、インターネットに接続することのできる自分用の機器を使用していた期間をすべて選択してもらった（選択肢は「小学校入学前」「小学校低学年（1～2年生）」「小学校中学年（3～4年生）」「小学校高学年（5～6年生）」「中学校1～2年生」「中学校3年生」「高校1～2年生」「高校3年生」「高校卒業後～大学・専門学校等」「大学・専門学校等卒業後」であった）。

次に、②の「通信量・時間のコントロール状況」については、①で使用していたと回答した期間について、「かなりコントロールできていた」から「全くコントロールできていなかった」までの4段階で評定を求めた。また、「危険・トラブル回避に関する状況」については、安全な使い方が「完全にできていた」から「全くできていなかった」までの4段階で評定を求めた。

また、「③②の管理における自律・他律の程度」については、①で使用していたと回答した各期間について、「通信量・時間のコントロール」と「危険・トラブル回避」のそれぞれについて、「すべて自力で（自分で考えて）コントロールしていた」、「だいたい自力で（自分で考えて）コントロールしていたが、親や家族などにも少し頼っていた」、「半分程度は自力で（自分で考えて）コントロールしていたが、半分程度は親や家族などにも頼っていた」、「だいたい親や家族に頼っていたが、少しは自力で（自分で考えて）コントロールしていた」、「すべて親や家族などに頼っていた」の5段階で評定を求めた。

（2）インターネット使用態度

現在の（大学生時点での）インターネット使用態度として、表1に示す8項目を使用し、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階で評定を求めた。

（3）インターネット依存傾向

インターネット依存傾向を測定するために、インターネット依存度テスト（樋口，2017）（久里浜医療センター訳，20項目、「全くない」から「いつもある」までの5段階評定^{*1}）を使用した。

3 調査の実施方法

大学の教職科目の授業終了後に受講者の学生を対象に調査への協力を求めた。調査は無記名で、回答者個人が特定されない方法で行われた。調査の実施にあたり倫理的な配慮として、調査への参加は任意で参加を拒否することによる不利益は無いこと、また、回答したくない項目への回答は不要であることを説明した。

表1 現在のインターネット使用態度を問う項目

項目 番号	内 容
①	インターネットの適切な使い方について、ふだんから考えている
②	インターネットの使い方について、自分なりのルールを決めている
③	勉強や生活の妨げにならないよう、インターネットなどの使用時間や通信量をコントロールしている
④	インターネット上で人とやりとりをする際に、危険やトラブルに巻き込まれない安全な使い方ができる
⑤	インターネット上で人とやりとりをする際に、相手を傷つけない使い方ができる
⑥	インターネット上で、自分や他の人の個人情報やプライバシーをきちんと守れる
⑦	インターネットの適切な使い方について、ふだんから自分の身の回りの人と話し合っている
⑧	身の回りの人がインターネットの不適切な使い方をしているのに気づいたら、やめるように言える

Ⅲ 結果と考察

本研究では、子どもの自律的なインターネット使用態度を育てるための手がかりを得るため、インターネット使用開始時点での使用状況、親や家族による指導や介入の状況と、大学生である現在の使用態度、インターネット依存傾向との関連について検討することを目的としていた。

そのため、調査参加者のうち、自分用のインターネット接続環境を入手した時期として、小学校5～6年生から中学校3年生までと回答し、かつ回答に不備の無かった60名（男性26名、女性34名）を以下の分析の対象とした。小学校中学年以下で使用を開始するケースであれば、保護者のコントロールのもとで使用する場合が大半を占め、一方、高校生以上で使用開始するケースであれば子ども自身でコントロールして使用する場合が大半を占めると考えられるため、インターネット使用開始時点での親や家族による指導や介入の状況に個人差が存在すると考えられる上記ケースを分析対象とした。

分析に用いた各変数は、以下のように算出した。

まず、インターネット使用開始時期の変数については、「通信量・時間のコントロール状況」と「危険・トラブル回避に関する状況」の各4段階の評定値（1～4）を加算して「インターネット使用状況」として使用した。高い値ほどコントロールができており、リスク回避ができていることを示す。また、「自律・他律の程度」については、「通信量・時間のコントロール」と「危険・トラブル回避」のそれぞれについての、自律・他律の程度の5段階の評定値（1～5）を、自律的に管理できているほど高得点になるように加算して使用した。

次に、現在（大学生時点）の変数については、「インターネット使用態度」として、表1に示す8項目の評定値（5段階評定）を使用した。それぞれ1～5の値をとり、高い値ほど望ましい使用態度であることを示す。また、「インターネット依存傾向」として、インターネット依存度テストの得点を用いた。インターネット依存度テストの得点範囲は100～20点であり、高得点ほど依存傾向が強いことを示す。評定値の解釈として、70点以上はネット依存的傾向高、69～40点はネット依存的傾向中、39～20点はネット依存的傾向低と解釈される（樋口，2017）。

1 各変数の基礎統計量

各変数の基礎統計量を表2に示す。また、「インターネット依存傾向」の度数分布については、依存傾向高レベル（70点以上）に3名（5.1%）、依存傾向中レベル（69～40点）に34名（56.6%）、依存傾向低レベル（39～20点）に23名（38.3%）が分布していた。

表2 各変数の基礎統計量¹⁾

	平均値	(SD)	得点可能範囲
インターネット使用開始時の変数			
インターネット使用状況	6.35	(1.52)	2 — 8
自律・他律の程度	7.48	(2.24)	2 — 10
現在（大学生時点）の変数			
インターネット使用態度 ²⁾			
①適切な使い方を考える	3.42	(1.08)	1 — 5
②自分なりのルール	3.03	(1.09)	1 — 5
③使用時間・量のコントロール	3.10	(1.07)	1 — 5
④安全な使い方	4.32	(0.75)	1 — 5
⑤傷つけない使い方	4.38	(0.80)	1 — 5
⑥プライバシーの保護	4.17	(0.85)	1 — 5
⑦適切な使い方を話し合う	2.35	(1.02)	1 — 5
⑧不適切な使い方への介入	3.07	(1.10)	1 — 5
インターネット依存傾向	44.38	(12.96)	20 — 100

¹⁾ N=60.

²⁾ インターネットの使用態度の各項目内容（①～⑧）は表1を参照のこと。

2 変数間の関連

インターネット使用開始時の各変数（「インターネット使用状況」、「自律・他律の程度」と、現在（大学生時点）の各変数（「インターネット使用態度」8項目、「インターネット依存傾向」）の間の相関係数を表3に示す。なお、「インターネット使用状況」と「自律・他律の程度」の間の相関係数は、 $r=-.07$ (*n. s.*)

であり、両者間には関連はみられなかった。また、現在（大学生時点）の変数間の相関係数を表4に示す。

表3に示すように、変数間に強い相関関係はみられなかったが、使用開始時の「インターネット使用状況」は、現時点での「④安全な使い方」と有意な相関が示され、使用開始時に低リスクな使い方ができている人ほど、現時点においても安全な使い方ができていると認識していた。また、「自律・他律の程度」は、「⑦適切な使い方を話し合う」との間に有意な負の相関が示され、使用開始時に他律的な状況であった人ほど、現時点でも自分の周囲の人との間でインターネットの使い方について話す傾向があるといえる。

加えて、統計的には有意傾向にとどまったが ($p < .10$), 「インターネット使用状況」と「自律・他律の程度」はともに「インターネット依存傾向」との間に負の相関が示された。使用開始時に低リスクで自律的な使い方ができていた人ほど現在のインターネット依存傾向が低い傾向が示唆される。

これらのことから、使用開始時の使用実態が望ましいものであるほど大学生時点でも安全な使用ができている傾向があり、また、使用開始時に親・家族等がしっかりと関わることで、その後もインターネットの使い方について話題にし共有していける可能性が高まると考えられる。また、使用開始時の使用実態が望ましく自律的に管理できているほど大学生時点においてインターネット依存に陥っているリスクは低い可能性が考えられる。

表3 各変数間の相関係数¹⁾

	インターネット使用開始時の変数	
	インターネット使用状況	自律・他律の程度
現在（大学生時点）の変数		
インターネット使用態度 ²⁾		
①適切な使い方を考える	-.10	-.04
②自分なりのルール	-.17	-.06
③使用時間・量のコントロール	-.20	-.08
④安全な使い方	.27*	.15
⑤傷つけない使い方	.08	.13
⑥プライバシーの保護	.23	.05
⑦適切な使い方を話し合う	-.21	-.30*
⑧不適切な使い方への介入	-.10	.05
インターネット依存傾向	-.25 ⁺	-.23 ⁺

¹⁾ $N=60$. * $p < .05$, ⁺ $p < .10$.

²⁾ インターネットの使用態度の各項目内容（①～⑧）は表1を参照のこと。

表4 現在(大学生時点)の各変数間の相関係数¹⁾

	インターネット使用態度							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
インターネット使用態度 ²⁾								
① 適切な使い方を考える		.58*	.39*	.02	.24	.28*	.53*	.43*
② 自分なりのルール			.65*	.01	.20	.10	.49*	.27*
③ 使用時間・量のコントロール				-.04	.23 ⁺	.15	.42*	.31*
④ 安全な使い方					.47*	.58*	-.26*	-.13
⑤ 傷つけない使い方						.40*	-.02	-.16
⑥ プライバシーの保護							.17	.08
⑦ 適切な使い方を話し合う								.40*
⑧ 不適切な使い方への介入								
インターネット依存傾向	-.02	-.06	-.06	-.27*	-.08	-.30*	.07	.02

¹⁾ N=60. * $p<.05$, ⁺ $p<.10$.

²⁾ インターネットの使用態度の各項目内容(①~⑧)は表1を参照のこと.

3 インターネット使用開始時の使用実態別にみた, 大学生時点でのインターネット使用態度およびインターネット依存傾向

インターネット使用開始時の使用実態と, 現在(大学生時点)の「インターネット使用態度」, 「インターネット依存傾向」との関連について検討するために, インターネット使用開始時の使用実態にもとづく4群を設定した。すなわち, 「インターネット使用状況」の望ましさの程度(高リスク, 低リスク)および「自律・他律の程度」(自律, 他律)により, 低リスク自律群, 低リスク他律群, 高リスク自律群, 高リスク他律群の4群に分類した(表5)。

各群の大学生時点での「インターネット使用態度」および「インターネット依存傾向」の評定値を表6に示す。「インターネット使用態度」および「インターネット依存傾向」について4群間の平均値の差の検定(一要因被験者間分散分析)を行った結果, 群の主効果が有意であったのは, 「④安全な使い方」($F(3, 59) = 4.19, p < .05$)と「インターネット依存傾向」($F(3, 59) = 3.61, p < .05$)であった。多重比較の結果, 「④安全な使い方」においては, 低リスク自律群が高リスク自律群, 高リスク他律群よりも有意に評定値が高かった。また, 「インターネット依存傾向」においては, 低リスク自律群が高リスク他律群よりも有意にインターネット依存傾向が低かった。

これらのことから, インターネット使用開始時において, 低リスクな使い方が自律的にできていた群は, 大学生の時点において, 高リスクであった群よりもトラブル予防という点においてより安全に, また, 周囲からの指導・介入があつてなお高リスクな使い方をしてきた群よりも, インターネット依存のリスクが低い状態で, インターネットを使用できているといえる。

これらのことから, インターネットを使い始める際の使い方は, その後の使

い方とも関係しており、やはり、最初から比較的自律的で望ましい使い方ができていたケースではその後も安全な使い方や依存のリスクが低い状態を保つ傾向があるといえる。一方で、低リスク他律群について着目してみると、インターネット依存傾向の得点は、統計的に有意な差ではないものの低リスク自律群との間に開きがあり、高リスク自律群の得点や高リスク他律群の得点のほうに近い。使用実態そのもののリスクは低い状態であっても他律的な力に支えられてコントロールされていたのであれば、その後、他律的な力が低減した時点では良好な使用状況を保てるとはいい難いと解釈できる。同様に高リスク他律群についてみると、統計的に有意な差は低リスク自律群との間のみではあるが、依存傾向の得点の平均値をみると高リスク自律群との間にも約5点の開きがある。これらのことから、インターネット使用開始時の使用状況を捉える際に、リスクの少ない使い方をできているかどうかという観点だけでなく、自律的か他律的かという観点も必要であることがうかがえる。さらに、最初は他律的な方法で使用状況をコントロールし望ましい状態に保つとしても、成長とともにそれをいかに本人の自律的なコントロールの力に置き換えていくかという点もポイントになると考えられる。

表5 インターネット使用開始時の状態にもとづく4群の「インターネット使用状況」と「自律・他律の程度」の平均値 (SD)

	インターネット使用開始時の状態				群間差 検定 ¹⁾
	1 Lリスク自律 (n=15)	2 Lリスク他律 (n=15)	3 Hリスク自律 (n=16)	4 Hリスク他律 (n=14)	
使用状況 ²⁾	7.53(0.64)	7.73(0.59)	5.06(0.93)	5.07(1.00)	50.65** 2,1 > 3,4
自律・他律 ³⁾	9.47(0.74)	5.40(1.68)	9.19(0.91)	5.64(1.15)	52.86** 1,3 > 4,2

¹⁾ 4群を水準とする1要因被験者間分散分析と多重比較 (Tukey法) の結果 (F値と有意水準 (** $p < .01$), 群間差) を示す。

²⁾ 「インターネット使用状況」

³⁾ 「自律・他律の程度」

表6 インターネット使用開始時の状態群別にみた
大学生時点での「インターネット使用態度」と「インターネット依存傾向」

	インターネット使用開始時の状態				群間差 検定 ¹⁾
	1 Lリスク自律 (n=15)	2 Lリスク他律 (n=15)	3 Hリスク自律 (n=16)	4 Hリスク他律 (n=14)	
使用態度 ²⁾					
①	3.13(1.46)	3.47(0.99)	3.75(0.86)	3.29(0.91)	0.93 _{n.s.}
②	2.87(1.30)	2.93(1.16)	3.19(1.11)	3.14(0.77)	0.30 _{n.s.}
③	2.80(1.32)	3.07(1.10)	3.31(1.01)	3.21(0.80)	0.65 _{n.s.}
④	4.80(0.41)	4.40(0.63)	4.06(0.77)	4.00(0.88)	4.19* 1 > 3,4
⑤	4.60(1.06)	4.40(0.83)	4.31(0.60)	4.21(0.70)	0.60 _{n.s.}
⑥	4.47(0.74)	4.27(0.96)	3.94(0.85)	4.00(0.78)	1.29 _{n.s.}
⑦	1.87(1.19)	2.33(1.05)	2.38(0.81)	2.86(0.86)	2.44 ⁺
⑧	2.80(1.15)	2.87(0.92)	3.38(0.96)	3.21(1.37)	0.96 _{n.s.}
依存傾向 ³⁾	36.00(10.64)	46.20(7.84)	45.38(13.89)	50.29(15.11)	3.61* 1 < 4

¹⁾ 4群を水準とする1要因被験者間分散分析と多重比較(Tukey法)の結果(F値と有意水準(* $p < .05$, $^+p < .10$), 群間差)を示す.

²⁾ 「インターネット使用態度」. ①~⑧の各項目内容は表1を参照のこと.

³⁾ 「インターネット依存傾向」.

4 本研究の課題と展望

本研究において、インターネットの使用し始めの時期の使用状態がその後の使用態度やインターネット依存傾向と関連することを示した。また、使用し始めの頃の使用状況の望ましさだけでなく、本人が自律的に行ったかどうかという点も必要な観点であることを示した。しかし、本研究の課題として、まず調査対象者が少数であり大学生に限られていたこと、および大学生に小学校高学年~中学生の頃の使用状況を回想して回答を求めたことから、サンプルの数と質の問題が考えられる。また、今回の分析では、インターネット使用開始時の

使用状態にのみフォーカスしたが、その後の使用歴についても検討していく必要がある。さらに、子どものインターネット使用における自律・他律をどのように捉えるか、その捉え方そのものについても検討・再考の余地が考えられる。子どものインターネット使用において自律的な使用態度を育む要因の検討を進めるとともに、自律的な使用態度を育むための開発的な関わりのポイントを示唆する知見の収集が望まれる。

参考・引用文献

- Campbell, M. & Bauman, S. (2018). *Reducing cyberbullying in schools*. Elsevier.
- 樋口 進 (2017). 心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るのか ミネルヴァ書房
- 内閣府 (2020). 令和元年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r01/net-jittai/pdf-index.html>
- 西野泰代・原田恵理子・若本純子 (2018). 情報モラル教育 知っておきたい子どものネットコミュニケーションとトラブル予防 金子書房
- 酒井郷平・塩田真吾 (2018). 中学生のインターネット依存傾向の改善における「自律的な利用」の有効性に関する調査的研究 コンピュータ&エデュケーション, 45, 97-91.
- Strohmeier, D., Aoyama, I., Gradinger, P., & Toda, Y. (2012). Cyber-victimization and cyberaggression in eastern and western countries: Challenges of constructing a cross-cultural appropriate scale. In S. Bauman, D. Cross, & J. Walker (Eds.), *Principles of cyberbullying research: Definitions, measures, and methodology* (pp. 202-221). New York, NY: Routledge.

付記

本研究は、科学研究費助成金（課題番号 17K04863）の助成を受けたものです。記して謝意を表します。
本研究の一部は、日本発達心理学会第31回大会にて発表しました。

註

※1

久里浜医療センター

IAT : Internet Addiction Test(インターネット依存度テスト)

<https://kurihama.hosp.go.jp/hospital/screening/iat.html>

Relationship between Attitude towards Internet Use, Tendency of Internet Addiction and Internet Usage at the Time of First Use in university Students

MIYAKE Motoko*1

The relationship between attitude towards Internet use, tendency of Internet addiction and Internet usage at the time of first use was examined using a questionnaire for university students. Analysis was conducted 60 students who started using the Internet between 5th grade and 9th grade among the students who participated in the survey. As a result of the analysis, the following were mainly clarified. The more desirable the usage at the start of use, the safer it tends to be used even at the time of university students. In addition, the more desirable and managed autonomously the usage at the start of use, the lower risk of Internet addiction at the time of university students. From these facts, it was suggested that it is important to understand the usage not only from the viewpoint of the desirability but also from the viewpoint of autonomousness or heteronomy regarding the problem of children's Internet use.

Keywords: information moral education, attitude towards Internet use, tendency of Internet addiction, autonomous use

*1 Graduate School of Education, Okayama University
